

菊池寛「無名作家の日記」論

——『文章世界』と悩める文学青年たち——

石川 かれん

菊池寛「無名作家の日記」⁽¹⁾は、前田潤が「京都時代の菊池寛の、在京「新思潮」同人達に対する恨みつらみを綴ったモデル小説としての視点を離れて読むことは難しい」⁽²⁾と指摘したように、『新思潮』同人の人間模様を前提に受容されてきた。「もちろん事実関係に関してはかなりの相違がある」⁽³⁾と安藤宏が指摘する通り、本文の記述は実際の事件と一致していない。とはいえ作品のモチーフに作者の伝記的な事実が深くかわっていること、「富井」を菊池寛、「山野敏夫」を芥川龍之介と見做しながら「菊池寛自身の劣等感が滲み出ている」作品として読み継がれてきたことは確かである。一方、片山宏行は「本作の最大の特徴は、まずそのモデル性にある」⁽⁵⁾ことを承認しつつ次のように指摘している。

しかしよく考えてみると、右の要素から形作られている富井（菊池）の不遇の物語は、菊池寛の生涯を知る現代の読者によって最もよく成立する悲劇であって、同時代読者がどれほどの

モデル性に反応したかは疑わしい。瀧田の心配にしても、知的で諧謔的な作風で認知されていた芥川のイメージをよく知る、いわば文壇通であったからこそその懸念であって、ほとんどの読者がそこまで敏感に感じ取ったかどうかは断定できない。⁽⁶⁾

『中央公論』の滝田樗陰が「無名作家の日記」掲載前にそのモデル性を指摘したことは、周知の通り菊池寛「自信がなくて意外にも高評だった「忠直卿行状記」」⁽⁷⁾で示されている。ここで、菊池のいわゆる文壇立志篇であり芥川龍之介と久米正雄の名を挙げながら本作の発表経緯を書くこの記事が発表される以前の「無名作家の日記」同時代評を確認したい。例えば『文章世界』の投書家でもあった中村白葉が「私共同じ道を歩んでゐる者には別種の意味で興味が深かった」⁽⁸⁾と評す他、中村星湖は大正七年の文壇を総括する文章の中で「此作者（菊池——引用者注）が認められた事に就いても、私は友情とか団体的関係とかいふ事を考える。」⁽⁹⁾と書くが「無名作家

の日記」における具体的なモデルには触れていない。これらの評からも、本作のモデルが読者と共有されたのは「自信が無くて意外にも高評だった」「忠直卿行状記」及び先行研究で取り上げられてきた芥川龍之介「あの頃の自分の事」⁽¹⁰⁾が発表された大正八年以降であるとわかる。

モデル性に関連して考えたいのは、本作が「富井の日記」ではなく「無名作家の日記」と題されていることである。「富井」という人名は菊池の自伝的な小説に頻出し、発表時期の近いものとしては「大島が出来る話」⁽¹¹⁾の富井譲吉、「青木の出京」⁽¹²⁾の広井雄吉、「葬式に行かぬ訳」⁽¹³⁾の富井雄吉がいずれも菊池自身の経験が仮託された人物と見做される。ゆえに固有名詞として重要であり、また日記や手記の形式を模す作品の表題に手記の筆者名を冠する様式は珍しくないことを考えれば、ここで「無名作家」が表題として選択されていることの意味を考えざるを得ない。このために参照したいのが北村透谷「一生中最も惨憺たる一週間」の原稿を検討した宗像和重の指摘である。

実際にこの原稿は、枠目のない罫線紙に筆で書かれているが、冒頭の行に記された表題「一生中最も惨憺たる一週間」の上には、はじめ「北村門太郎の」と書かれていたのを、線を引いて消している様子がうかがえる。北村門太郎の固有の経験として書かれた「惨憺たる一週間」の記録が、自分一人の備忘録にと

どまらず、普遍的意味をもち得るのだという意識が、「北村門太郎の」を削除させているのだろう。⁽¹⁴⁾

個人の記録である日記に「無名作家」と冠することには、富井の「固有の経験として書かれた」日記が「無名作家」という枠組みにおいて「普遍的意味をもち得るのだという意識」が働いているのではないか。だとすれば、本作の発表時に想定されたのは伝記的な事実より、むしろ中村白葉が前掲の引用で「同じ道を歩んでゐる者」と書いたような「無名作家」すなわち文学青年の想起であったと考えられる。菊池自身、「山野と云ふ天才作家は、決して芥川をモデルにしたものではなかつた」⁽¹⁵⁾、「つまり、「無名作家の日記」は、小説であるだけに、可なり違つているので、その当時芥川や久米に対し、僕が隔意があつたわけではない」⁽¹⁶⁾とモデル情報と本文を照応する読書法に反論してきたが、その意味で、本作はこれまでその価値を限定的にしか論じられてこなかつたといえる。

以上の観点から本稿は「無名作家の日記」を、従来重視されてきた菊池自身のモデル情報に限らない「無名作家」の状況と照合した読解によつて同時代的な文学史を踏まえた再検討を試みるものである。そのために、本作における「無名作家」を取り巻く環境を考えるとからはじめたい。

一 「無名作家」のルーツ

「文壇」の序列はジャーナリズム、市場によって決定される⁽¹⁷⁾と論じる山本芳明は大正七年前後の原稿料の問題を踏まえつつ、「流行作家」として注目された時期の芥川ですら、生活費を捻出するためには横須賀の海軍機関学校に教員として勤める必要に迫られた事実を踏まえ、本作を次のように論じている。

「文壇を闊歩して居る」(×月×日)「流行作家」といえども、大正七年の時点では定職や副業を必要としていたのである。山野たちを呪う富井だが、そこまで絶望することはなかったのである。「無名作家の日記」の設定には実態を無視した誇張があった⁽¹⁸⁾。

最終的に富井が「田舎の教師」を「安住地」とすることからも生業の問題は本文に示されている。その点で指摘は重要なものだが、作中で扱われる金銭的な話題は職業作家の原稿料よりむしろ「無名作家」をめぐる懸賞小説と賞金ではないか。ここでは、生計を営むに足るだけの原稿料を得られるかではなく金額の大小にかかわらず原稿に値が付くこと、すなわち懸賞に当選した小説が活字となって掲載されることが重視される。「無名作家」が直面していた問題は

原稿料の高低以前に原稿が商品として受け入れられるか否かにあり、それを端的に試行できるものが懸賞小説といえる。このような懸賞小説の流行について、大正六年の『文章世界』では次のように書かれている。

明治三十五年頃から四十年頃までが最も懸賞小説界の活気のあつた時代である。此頃の懸賞雑誌は博文館と金港堂のが多く『文芸倶楽部』は殆んど毎号一等二十円以下三等まで募集し、『文章世界』発行前の『中学世界』は年四回の臨時増刊毎に一等十円以下三等まで募集した。此外金港堂の『文芸界』や『青年界』も前同様の募集をやつてゐた『万朝報』も今日と同様一等十円の募集をやつてゐたので、懸賞小説家は可なり多忙の方であつた⁽¹⁹⁾。

「無名作家の日記」に登場する吉野辰三⁽²⁰⁾が「投書家として栄えた」人物であることから、本作の文学青年たちに懸賞小説や投書欄への投書とその採用実績が重視されていることは自明である。また、富井が綴る日記には元号や年の記載がないものの冒頭から末尾までに約三年が経過していること、作品の発表が大正七年であることに加え、ここで大学生の富井が「明治四十年頃」を「少年時代」として回想していることから、日記はおおよそ明治末から大正初期に綴られたものと推定できる。とすれば、ここでの文学青年たちは「明

治四十年頃」の懸賞小説、あるいは投書雑誌の最盛期に育った世代であるといつてよい。このことを踏まえ、吉野辰三の初登場部分を次に引用する。

吉野辰三！以前俺はあの人を、何んなに崇拜したか分らない。明治四十年頃の文学世界の読者に取つて、あの人の名は何んなに輝き、何んなに魅力を持つて居たろう。田山花袋選の懸賞小説に幾度も投書して、成功しなかつた俺は、吉野君の華やかな活躍を何んなに羨望したか分らなかつた。

が、天才とまで激賞された吉野君は、その後文学世界の投書を止してから、もう何年になるかも知れないが、杳として文壇に名を現す所がない。(中略)吉野君は、昔の夢を余程誇張して居るのだ。(中略)投書家として栄えた事を、一かどの作家でもあつたやうに幻想して、楽しんで居る吉野君に対して、俺は気の毒のやうな淋しいやうな気がした。

富井はかつて投書家として成功した吉野を「崇拜」したと語るが、吉野の輝かしい投書家時代は「昔の夢」と規定されるがゆえに富井の憧れも過去のものにすぎない。そのうえで注目したいのは引用部における「田山花袋」の語である。本作において作家や雑誌を指すいくつかの固有名詞が実在の名称をパロディ化して造形されていることは明らかで、先行研究においても繰り返し指摘されてきた。ゆ

えに、ここで「田山花袋」が実際の筆名で登場していることには注目せざるを得ない。まず引用部から「田山花袋」の人物像を確認すると、吉野は明治四十年頃の雑誌『文学世界』の懸賞小説の常連、富井は『文学世界』の読者であり「田山花袋」選の懸賞小説に幾度も応募して落選したとの記述がある。よつて『文学世界』で懸賞小説の選者を担っていたのが「田山花袋」と読解できる。

ここで吉野は「明治四十年頃」「田山花袋」選の懸賞小説最盛期を象徴する投書家として綴られているが、「田山花袋」の語もまた象徴として用いられている。例えば、谷崎潤一郎を彷彿とさせる「川崎純一郎」は本文に明示される「一番近い目標」として扱われるが、「田山花袋」が示すのは「明治四十年ころ」の懸賞小説の選者という役割だけではない。ここで「田山花袋」という語は田山録弥という個人を指すのではなく、文学青年たちに共有されたかつての憧れかつ過去の象徴として扱われる。であるからこそ、「田山花袋」の氏名はパロディ化されず、実際の筆名で登場する。

また、富井が文科を選択した理由「文学者崇拜と云ふ多岐もない、少年時代の感情」や、山野らの同人誌を吉野が「古い！まるで、自然主義から一步も出て居ないのだ」と評すること、山野の書簡に「君は高等学校の一年生時代から、思想的には一步も進歩して居ないね。」と記されることから、明治四十年前後の「田山花袋」あるいは「自然主義」最盛期をルーツとしつつ、そこからの脱却を志向せんとする世代が本作における文学青年たちであることを指摘で

きる。もちろんここで「自然主義」の語はゾラをはじめとする具体的な文学思潮を指すのではなく、かつて流行し今や廃れた過去の象徴として用いられることとなる。

念のため作者の話もしておけば、菊池自身は先に引用した「半自叙伝」で自身の少年時代について「その当時文壇を風靡していた自然主義の影響を殆ど受けなかった。私が若し、その三、四年間、文学に執心だったら、きっと自然主義の使徒になり、到底文壇に出ることは出来なかったと思う」（昭和三年六月）、投書について「僕は、少年時代から、投書と云うことを全然したことがなく、（中略）およそ此の意味もない俳句を投書した以外、投書したことがない。投書をしていたならば、当時の文壇かぶれがして、到底作家となることが出来なかったと思ひ投書をしなかったことをいいことをしたと思っている」（昭和四年二月）と書いており、自身が自然主義最盛期の投書文化に接近しなかったことを記している⁽²¹⁾。

このように「自然主義」と「田山花袋」に自身が感化されなかったことを回想する点で、かつて吉野を「崇拜」した富井と作者菊池は異なっている。また、「無名作家の日記」発表時に近い時期の言説としては大正五年の『新思潮』編集後記⁽²²⁾において花袋の作品を「何処が面白いのか分らぬ」「ゼネレーションの相違は如何ともしがたい」と評するものがある。同後記中では芥川が、感心する作品と作家は「自然派の作家の中にもゐる」と書いており、菊池の周辺において「自然主義」あるいは「田山花袋」という語は前世代を示す

ものとして共有されていたことが明らかである。

このことを確認したうえで話題を雑誌『文章世界』に戻したい。もちろん誌名はパロディ化されているが、明治四十年頃に「田山花袋」が選者を務めた懸賞小説の掲載誌として影響力の強いものは博文館の『文章世界』である。明治三十九年三月から大正九年十二月まで刊行された『文章世界』の創刊号の投稿募集には「選評殊に丁寧親切を旨とし、意足りて文伴はざるものの如きは勉めてこれを添削して以て紙上に掲載せんことを期せり。」と記されており、ここには賞金を掲げて投書を募るだけでなく、丁寧な「選評」と「添削」によつて投書家及び作家を養成せんとする意志が表明されているわけだが、このことを踏まえ、次章で『文章世界』に掲載された文学青年をめぐる言説をいくつか検討したい。

二 『文章世界』と文学青年の日記

まず、「大家」による回想の体裁をなす三つの記事を確認したい。一卷七号の「余の投書家時代」⁽²⁴⁾は「某大家」へのインタビュー形式で書かれている。ここでは、「読者の大多数は熱心な投書家で、今の大家——我輩も大家の一人かねえ——が、かつて投書家時代には、どんな風であつたか、どんな心持であつたか、嘸ぞ知れたからうと云ふのか。うん、尤もだ。それはさうだらうよ」として匿名の「某大家」による回想が語られる。「某大家」はかつて「『天才新誌』と

か、「筆戦場」とか、その当時の「文章世界」とも云ふべき作文雑誌へ投書」し、「載りさへすれば、六号活字でも二号活字位に見えたこと、また小島烏氷が『文庫』への投書によってデビューした逸話を挙げながら、「投書が載せられるのと、没になるのとは、其の人の将来に非常な影響を与へることがある」と語る。ここでは原稿料の問題にも触れられており、はじめて原稿料を得た時には「此の際、額の多少は我輩のアツカウントの中に入つてはるなかつた。唯だ始めて貰つた原稿料といふので、嬉しくて堪らず」近親者に記念品を配ったことが書かれている。

三卷十三号には田山花袋「予の投書家時代」⁽²⁵⁾が掲載されている。

花袋は『穎才新誌』に投書していたこと、同社で開催された「投書家懇親会」で太田玉茗と知り合つたこと等自身の投書経験を書く。

三卷十五号「予の懸賞小説家時代」⁽²⁶⁾では筆者が賞金欲しさで懸賞に応募したと書かれるが、その動機は「今でもその最初が自分の技倆を問ふよりも金が欲しいといふ方が強かつたのを思ふて何やらすまぬ気もする」と非難される。投書をするうち「創作に対する心持も余程真面目になつて来」た筆者は、次第に「こんな懸賞小説などにはばかりか、つて居ても仕方がない」と考えた末、「懸賞小説家を止して上京した。そして文壇の空氣に接して益々自己の空虚を感じた。」としている。

三つの記事はいずれも文壇立志篇として位置付けられるが、ここで「大家」が作家としてのルーツを投書に求めることは読者の投書

欲とそれによる出世の志向を喚起し、読者を投書へ向かわせるための仕掛けに他ならない。このように投書を喚起するための記事が数多く掲載される中で、注目したいのは文学青年と「無名作家の日記」が採用した日記体の連結である。このことについて、先行研究はしばしば大正期の『文章俱樂部』に掲載された「小文豪日記」⁽²⁷⁾、「文学青年の生活から」⁽²⁸⁾に言及してきた。いずれも日記体で無名の文学青年の生活を書いた記事で重要だが、分量は見開き一ページと限られる。一方『文章世界』にも同種の記事が創刊当初から複数掲載されており、発表時期から『文章俱樂部』に先行するものとして挙げられ、分量も充実している。『文章世界』では文叢欄にも小説、日記、小品文等に日記体のものが見られるが、分量やジャンルの相違から一括して論じることは困難なため、本稿では本欄に掲載された日記記事を対象に検討する。

一卷二号に掲載された「大学生の日記」⁽²⁹⁾は作者未詳で記者が偶然入手した日記の一部を紹介する体裁である。本文では横須賀の海軍にいる弟を尋ねる記事が主要な話題として綴られる。本記事では日記筆者が『帝国文学』を購読していることが示される他、日記の後ろに置かれた記者による注によって「新体詩を賦し、和歌の物語を為し、且、一人の逍遙を好める」筆者の日記全体が「頗る小説的にして、趣に富」むことが付されている。本記事は後に挙げる記事や「無名作家の日記」のように筆者の苦悩や鬱屈が語られるものではないが、創刊から二号目の時点で既に文学を愛好する学生の日記へ

の関心が示されていることは興味深い。

五巻十六号に掲載された「初めて出京したる一文学青年の日記」⁽³⁰⁾

は文学志望の日記筆者が上京した七月から十一月までの日記の体裁をなしている。記事は二十日分にのぼり、分量も多い。上京した日記筆者は「無名の投書家」や「青年の味方」とされる大家らと交流し文学を志しながら、金銭的な貧困によって「一体、芸術つて俺達の考へてる程然く大した価値のあるもんだらうか」と考えるようになる。「三十銭の原稿を三十枚書いた」と日記筆者は作品を原稿料(量)によって示し、生活費のために懸賞小説に応募する。また記者の仕事で日銭を稼がんとして失敗する。最終的には金銭的自立を目指すことを掲げて日記は閉じられる。芸術と生活をめぐる日記筆者の葛藤が記されるのみならず、台詞による会話の再現や情景描写に富んでおり、内容と形式の双方で「無名作家の日記」に近い。

七巻七号の「一文学青年の告白——減び行く生活と芸術——」⁽³¹⁾では芸術と生活の問題がより明確に打ち出されている。上京初日は「生涯に記念すべき此貴い日」として「心が限りなく騒ぎ立て」落ち着かないと書いて筆を起こす筆者は、芸術を志す一方で酒におぼれ、日記を継続できない。数カ月一度の頻度で日記を開いては自身の不甲斐なさを綴り、酒量の増加と共に「貧乏になつて行く。生の力も、才能も。」とする筆者は生活費を稼ぐために「無学な浅薄な卑劣な原稿屋」を頼るようになる。雑誌へ創作を送るも不採用になり、「私はもう渾てに倦み、渾てに飽いた」として、「捨てた私の

芸術」を発見するために東京を捨てる記事で日記は終わる。最終日では日記筆者の放浪と自死が仄めかされ、飲酒の描写が感傷的になされる点には国木田独歩「酒中日記」⁽³²⁾の影響を指摘できるが、実際「初めて出京したる一文学青年の日記」と比較すると、事件や行為ではなく情緒や感想に記述が偏っている。

「初めて出京したる一文学青年の日記」と「一文学青年の告白——減び行く生活と芸術——」に共通するのは、日記の起筆が日記筆者の移動すなわち環境の変化を契機になされること、原稿の枚数が重視されつつ発表をめぐって日記筆者が芸術と生活の葛藤を抱えることの二点だが、このことは「無名作家の日記」との共通点でもある。また日記体という様式は明治四十年前後に流行していたことが山口直孝の「(日記体小説)の——引用者注——作品数を追うと、一九〇七年から一〇年頃が最盛期と言える。」⁽³³⁾との指摘で明らかにされている他、同時代には『文章世界』三巻十五号「文章講談 事実の見方と小説の形式」⁽³⁴⁾において「日記体の小説なども、その形はいくらも人の遣い古したもので格別斬新といふことは出来ぬ」と指摘されている。いずれにせよこの時期に浸透していた形式であることは明らかであろう。

以上の通り、明治四十年頃の『文章世界』では文学青年の日記体に関心が向けられていたのみならず、「無名作家の日記」にあらわれる問題意識、特に芸術と生活の葛藤が既に取り上げられていた。このことを確認したうえで、次章では富井の日記に綴られる三人の

無名作家、吉野・佐竹・富井の記述を検討してみたい。

三 活字に執着する文学青年たち

吉野辰三が日記に登場するのは十月一日・十二月二十九日・三月五日・×月×日の四日分の記事で、初日は先に引用した通り投書家としての経歴が語られる。十二月二十九日は山野らの同人誌「×××」創刊を聞き、煙草を「悠然と吸ひながら」「同人雑誌などへは、幾何書いても仕方がない」から「大きい雑誌に、書かなければ駄目」「僕は、同人雑誌などで、騒がないで、いゝ物が出来れば、文学世界あたりへ持ち込むよ。昔の縁で、嫌とは云ふまい」と語る。三月五日には「×××」本誌を見て「案外いゝものはないね」「あんなものは、誰にだつて書ける」「古い！まるで、自然主義から一步も出て居ない」と貶し、「やつぱり、同人雑誌なんかには、幾何書いても駄目だよ、相当位置のある雑誌で、発表しなければ」文壇には出られないと繰り返す。最終日である×月×日に至つては「あの人の創作が、相当な文芸雑誌に載つた事はまだ一度もない。」ことが記される。

吉野は言葉を荒げたり感情的な物言いをするのではない。一貫して余裕のある態度が描かれているが、余裕の根柢となるのは彼の投書家としての実績である。「僕だつて、之でも新進作家と云はれたことがあるんだからな」(十月一日)との台詞には、現状文壇に出

られないでいることを認めつつも自身が投書家として著名であったゆえに文壇に出られると信じる吉野の意識があらわれる。『文学世界』という「大きい雑誌」「相当地位のある雑誌」に掲載された経験が吉野の文学青年としての拠り所といえるが、もちろんここには矛盾がある。吉野が拠り所とする投書家としての実績は明治四十年頃の「自然主義」「田山花袋」的な文脈で形成されたものにもかかわらず、彼は「×××」に掲載された作品を罵倒する時に古さの象徴として「自然主義」の語を用いるからだ。紅野謙介はこの時期の懸賞小説について「いくつかの当選作を見てわかるように、むしろ『紋切形』への依拠が進行した⁽³⁵⁾」と論じているが、吉野もまた投書の「形」を批判しつつ、自身はそこから脱却できずにいる人物である。

佐竹は十一月五日・二月十日・三月十日・五月三日・五月十五日・×月×日の六日分の記事に登場する。十一月五日の記事には富井と佐竹の初対面が綴られるが、ここで佐竹は「昨日百五拾枚ばかりの短篇を、書き上げたのだが、何うも余り満足した出来栄とは思はない」「今僕は六百枚ばかりの長篇と、千五百枚ばかりの長篇とを書きかけて居る」と語り、富井はそれを次のように評している。

云ふ事が大きい上に、如何にも落着いて居る。自分の力作に充分な自信を持つて居て、俺のやうに決して焦せつて居ない。俺は此男に威圧されると同時に、一種の頼もしさを感じた。京

都にもかうした真摯な作家が居るのだ。恐らく此の男の名前は、文芸雑誌などには、六号活字で、も出た事はあるまい。が、此男は黙々として長篇の創作に従事して居るのだ。此男の書いた物を一行も読んで居ないから、此男の創作の質に就いては一言も云はれないが、六百枚、千五百枚と云ふ量から云つて、此男は何かの偉さを持つて居るに違いない。

引用部で注目されるのは作品が内容ではなく枚数によって判断されることである。富井が自身の戯曲を「僅かに七十枚」として比較することから枚数が比較可能な価値基準として機能していることが分かるが、特に佐竹は「この頃は創作熱が丸切り旺盛なのだ。毎晩三十枚は欠かした事はない」「少年時代からズーッと書き溜めたと云ふ高さ三尺に近い原稿を、俺の前に積み上げた。」(三月十日)、また自身の作品を「六百枚の方」「千五百枚の物」と枚数で呼び分ける等、一貫して自身の小説をその枚数で語る。富井は佐竹を繰返し「呑気」と称するが、その呑気さは積み上げた原稿、あるいは原稿用紙の量に依ることが明らかである。一方佐竹は五月三日、富井の「僅か七枚の小品」が創刊したばかりの『群衆』という雑誌に掲載されたのを見て激昂する。このことについて富井は佐竹の活字への執着を次のように指摘する。

俺の小品が七枚でも活字になつた事は、佐竹君に取つて決し

て愉快な事ではなかつたのだ。俺が山野の作品に依つて感じて居るやうな反感と焦躁とを、佐竹君もやつぱり感じて居るのだ。六百枚の長篇を書き上げて、堂々と小説の大道を歩んで居る筈の佐竹君が、活字になつた俺の僅か七枚の作品から圧迫を受けるとは、考へてみれば不思議なことだつた。

が、俺は俺の小品を無視しようとした佐竹君を、決して憎めなかつた。俺は山野より天分が劣つて居る事を自覚しながら、尚山野の出世を呪つて居るのだ。まして、自分の作品に充分の自信を持つて居る佐竹君が、自分の作品が活字になる前に、俺の片々たる作品が活字になつたのを不快に思ふのは、寧ろ当然の事かも知れない。

が、俺は考えた。創作ということが、ある人々の考へて居るように絶対のものなら、何故に人は只創作する丈で満足する事ができないのだろう。佐竹君の如きは、六百枚の長篇を書き上げた事其物に依つて、充分芸術欲を満足して居なければならぬ筈だ。夫が、何うして発表する事に就いて、あゝした苦悶があるのだろう。殊に俺などは創作と云ふ事よりも、先きに発表と云ふ事に就いて悶えて居る。本当の芸術欲よりも文壇の名声と云つたやうなものに囚はれて居る。が、佐竹君のやうに長篇を書き上げて居る人でさへ、活字になつた俺の七枚の小品を見ると、取り擾すのだから、俺が山野の作品が出る事に血眼になるのも、或は当然のことであるかも知れない。

このように佐竹は活字化された七枚の小品に動揺し、吉野は自身の作品が活字として雑誌に掲載された過去の栄光を語り続ける。

「無名作家の日記」では二章で掲げた日記記事と比較しても金銭的な問題への言及が少ないために、原稿が掲載されること、すなわち活字化の志向に問題を焦点化している。そのうえで、吉野が「自然主義」を古さの象徴とすること、佐竹が「一番長いのは五百枚の長篇で僕の少年時代の初恋を取扱ったもので、幼稚でとても発表する気にはなれませんよ」（三月十日）として自身の生活に材を求めた作品すなわち二章で掲げた文学青年の日記と同一の形式の作品を「幼稚」と称することからは、彼らが明治四十年頃の「自然主義」的な規範から逃れんと意識することが分かる。一方、活字への欲望を喚起する投書文化をルーツとする彼らはそこから脱却することができない。

もちろん、吉野と佐竹を活字志向の文学青年として造形するのは富井の日記記述である。その記述は「今凡ての成心を去つて、公平に俺自身を考える」（九月十三日）、「俺は、白状するが、もう三日ばかり、続けて図書館に通つた。そつと「×××」の評判を読むためにである。」（三月十五日）等一貫して冷静な記録によつてなされる。山野への嫉妬や上田博士への憤りが日記に綴られる箇所においても感情的に興奮した記述は避けられ、あくまでも自身の感情や感想が事実として記される。冷静さを保たんとするからこそ、富井は

自分自身にも作品の発表、活字化に対する過熱した欲望があることに気付く。

そのことは先の引用部における「文壇的名声」への言及の他、「×××」初号について「譬ひ小雑誌にせよ、活字になつて居る以上は、夫はもう立派に完成された、表現の形式である。」（三月五日）と書くことや、「六百枚の長篇を終つて、千五百枚の大作にかゝつて居る佐竹君よりも、三十枚ばかりの器用な短篇を書いて、一躍して認められた山野の方が、俺には何れほど羨ましいか分からなかつた。」（五月三日）とする記述に明白である。富井は自身が創作自体ではなく、創作による名声を志向していることを自覚し日記に綴る。もちろんこのことは先に引用した「文学者崇拜と云ふ多岐もない、少年時代の感情」で既に暗示されている。「文学者」を「崇拜」しそれを目指すことは、「文学者」という内実を伴わない空虚な肩書を志向することに他ならない。

このような富井の活字偏重が最も明確に表されるのは山野をめぐる二つの言語、すなわち小説と書簡をめぐる受容の差異である。富井の綴る日記には山野からの書簡が三度（十二月二十九日、五月十五日、五月廿五日）引用されるが、いずれも書簡本文が括弧で括られており、記述をそのまま引用した体裁である。ここで書簡の記述「何うだい！馬鹿に黙つて居るね。京都にも、少しは文学らしいものがあるかい。」「まあ刮目して、僕達の活動振を見て呉れ給へ。」（十二月二十九日）は「悪意に充ちた手紙」として受容される一方、

富井は「×××」初号について「山野の手紙から受けた夫よりも、もつと不快な面も現実的」な「圧迫」を感じたと書く。また、富井は書簡の開封を「何うせ俺を嘲笑し揶揄する為の、手紙だらうと思つたから、俺は一寸開封する気にならなかつた」として先延ばしにする一方、「△△△△」に掲載された作品については「反感を持つて居る彼奴の作品が、一刻も早く読みたくなるから不思議」「彼奴の作品が、読みたくて堪らなかつた」(五月三日)と書く。

「山野敏夫」は傲慢な自信家として認識されるゆえに富井は圧迫されてきた。だからこそ書簡は「開封する気にならな」い。一方で雑誌に掲載された山野の作品を「読みたくて堪らな」いのは、富井が活字という形式自体に価値を見いだすからである。いずれも山野によって書かれた文であるにもかかわらず、一方は雑誌を購入してまで読みたいという一方は手元にあつてすら読もうとしないことから、富井が活字という形式を重視していることが明らかである。富井は山野の「作品の力」自体も評価しているものの、他の同人、桑田・杉野・岡本の作品も「×××」掲載時には「纏つた出来」と評しており、やはり活字自体に価値を見出している。

このように、富井は日記を綴るうちに文学青年たちの活字偏重を自覚したからこそ、小雑誌に小品を、山野に「夜の脅威」の原稿を送付するに至る。「夜の脅威」は山野の出世を目的の当たりにしてすら「文壇の水準以下のものとは何うしても思はれなかつた。」(三月十五日)と書かれる通り、富井の出世、活字化のために充分な作品

とされるからこそ、「無論余りヒドイものは困るが、水準以上のものなら飲んで紹介するから。」(五月十五日)との山野の書簡に應じて送付される。この時山野へ宛てた書簡は「昂奮に充ち感激に充ちた手紙」で、そこには「明らかに卑しい哀願の調子」「強者に阿ねつて居るやうな、さもしい態度」があるとする富井は「夫を卑しむべき事として、思ひ止まり得る程の余裕はなかつた」と綴る。既に富井は自身の出世欲、活字への執着を自覚しているゆえに達成のための手段を選べない。

だからこそ、山野からの返事が「夜の脅威」を「低級な感傷主義」「何等のい、所も見出さなかつた。」と評して送り返すものであつた時に受けた打撃が大きかつたことが五月廿五日の記事で綴られる。ここでは「山野から手紙が来た。俺は夫を何等の感情を交えずに、此日記に再録して置かうと思ふ。此の手紙を見た時の、俺の感情は茲には、何うしても表現する事が出来ないから。」との文に続き、山野からの書簡が引用される。先に論じたように富井は日記執筆を感情的な記述を排して行なおうとするゆえに、山野の辛辣な書簡に対する感情は日記に「表現することが出来ない」とされるが、実際にはその断片が書簡の引用後に綴られる。日記を記述するために書簡を再読し書き写す行為が富井の感情、すなわち山野に対する憎悪と自己憐憫を刺戟した結果といえるが、ここでは山野が富井を侮辱する台詞を想像しつつ「云つたに違ない」として鍵括弧付きで記述しており、やや誇張された感情の興奮が綴られる。

本記事をもって富井が綴る日記は、書かないものとして設定された過剰な感情表現を綴ったことによって継続が困難となった。本来の目的を達成できない日記が継続されないことは自明だが、ここで問題となるのは「×月×日」の記事である。日付は伏字だが、「もう「×××」が出てから、二ヶ年半になる。」とあり、「×××」の初号は日記起筆の半年後に出ていることから、三通目の書簡（「五月廿五日」）から二年後と推定できる。ここで富井は作家志望を諦めると綴るが、時間的な隔たりからその理由が山野の書簡やそれに喚起された感情的な興奮のみにあるのではないことが明らかだ。ここで富井は、「作家としての生活以外に、意義のある生活がないやうに思つて居たのは、俺の迷妄だ。」「流行作家！新進作家！俺は、そんな空虚の名稱に憧れて居たのが、此頃では少し恥しい。」として、「明治大正の文壇で名作として残るものが、一体幾何あると思ふのだ。」と綴る。「×月×日」に至つて富井は「名作として残る」芸術作品を創作することではなく、自身の活字化、「流行作家」「新進作家」の肩書と共に活字を追ひ求めること、すなわち職業としての作家生活に意義を見出せなくなったゆえに筆を折つたといえる。

おわりに

このように活字化の希望を断つたにもかかわらず、富井が綴つた日記は「無名作家の日記」の表題を冠して作品化される。ここには、

日記という個人的な肉筆、つまり活字化を前提とする原稿ですらないそれが、作品化によつて活字で公開され、読まれることの違和感が存在している。このことは明治四十年頃には既に指摘されており、先に挙げた「文章講談 事実の見方と小説の形式」では「書束体」と「日記体」の小説を近いものとして挙げたうえで、「手紙ばかり、のべつに並べたて、あるのを讀むと、よくもこんなに手紙を都合よく集めて並べたものだといふやうな、皮肉な、しかしながら（原文ママ——引用者注）無理ならぬ不審の感が起らぬとも限らぬ」として次のように論じている。

要するにその手紙があまりに巧みに過ぎて、都合よく芝居の割り台詞のやうに出来過ぎてゐると、作りもの臭い感じを与へることになるのである。（中略）

それに日記体で書いた物は、毎日／＼普通の生活をして一日一日と送つてゆくうちに、種々の出来事が生じたのであるといふ感じを与へ、その日その日には、格別その事件がどういふ結果を生ずるであらうとか、どういふ変化を来すであらうといふことに、確かな見込のあるわけでもないのであるが、何の気もなしに附けて行くうちに、積もり積もつて、遂に一篇の物語になつたといふやうな感じをも与えて、いかにも無造作なやうな面白いところがある。但し、それが一歩やり損ずると、特にその事件の為に、都合よくいろ／＼の小さな出来事を割当て、

一日一日と書き分けて行つたやうにも見えるわけで、そこは余程手際宜くやる必要がある。

書簡や日記を装いつつ筋のある物語を仕立てんとする時、小説的な語りと實在性の間に軋轢が生じることで「作りの臭い感じ」が漂うことになる。それを避けるために、本文には公開の意図や作者あるいは紹介者の立場、背景に関する補足説明等公開の経緯が付される。先に引用した山口論は明治期の「日記体小説」について、「語り手は、冒頭や末尾に入手の経緯や記述者について注釈をする必要があった⁽³⁶⁾」と論じているが、実際二章で引用した『文章世界』所収の日記記事でも、「大学生の日記」は本文後に日記入手の経緯を語る付記があり、「一文学青年の告白」には題の横に細字で「初めて都に出て、二ヶ年近く暮した或る一人の文学青年の日記の処々を抜いて、其処に其青年の生活に於ける或る統一されたる何物かを求めて見たい」として日記を提示する意図が付されている。

しかしながら、公開の意図と経緯を提示したとしても肉筆を活字にすること自体の違和感は存在し続ける。松尾靖秋が「原稿用紙はもともとそこに書かれた文章が活字で印刷されることを予想したものである⁽³⁷⁾」と指摘し、『文章世界』の「投書規則」が創刊号から既に文字数と行数を指定する方式であったことから明らかなように、活字化を前提とする文は事前にその筆記法と形式が指定される一方、日記は発表を前提としないゆえに筆記の規則が定まっていない。そ

の意味で、日記の活字化に際しては原文から捨象せざるを得ない要素が発表を前提とする原稿に比較して多くなるが、それゆえに日記体という形式は活字に組まれる時に捨象される要素の存在を示唆することもできる。「無名作家の日記」の場合では、富井が日記に綴るまいとした感情の興奮や発表された作品からは読み取ることのできない山野の人格的な欠陥が示唆された要素として挙げられる。

とはいえ、活字になり得なかった要素を示唆できたとしても、捨象された要素そのものを日記に記すことは「何うしても表現することが出来ない」との記述通り困難である。捨象されたという事実自体は示すことができて、その内容を正確に記すことは困難であることが富井の日記には綴られる。このことについて参照したいのは、正宗白鳥が「自分のした事を、何でも、臆面なく書けば、それが新時代の小説であると思ふ浅はかな文学観⁽³⁸⁾」と指摘した明治四十年頃の文学青年の意識である。日記という日々の記録を活字化することは日記筆者の生活自体を作品として提出することである。だからこそ、文学青年の日記に関心を持ち、自身の日記をも活字化しようとすることは、白鳥が「浅はか」と指摘する思想の発露であり、自らの行為がそのまま作品になり得るという創作態度のあらわれに他ならない。

ここで文学青年たちは、本来活字でなかったものを活字化せんとする矛盾した行為に取り組んでいる。だからこそ、文学青年たちは芸術と生活をめぐって葛藤せざるを得ない。彼らにとっては芸術と

生活が直接結びつけられるものであるにもかかわらず、発表や金銭をめぐる現実はそれと乖離しており、文学青年の認識と現実の間には齟齬が生じている。だからこそ彼らは齟齬を自覚せず吉野や佐竹のように文壇に出られないまま月日を過ごし続けるか、あるいは富井のように齟齬を自覚したうえで筆を折ることになる。白鳥は「自然主義時代に、この派の作風を学んで、或ひはたゞ浅はかに真似て、やたらに小説らしい物を書いた年少者は多かつた。」⁽³⁹⁾とも書いているが、本作における「無名作家」たちは「年少者」の末席に位置付けられるだろう。

また、「無名作家の日記」発表時の文学青年と「自然主義」の影響関係は『文章倶楽部』の「青年文士録」からも窺える。例えば大正七年一月の新年号⁽⁴⁰⁾には「文壇三十年物語」として硯友社から白樺派までを総覧した附録がある。最終章では「文権」、「白樺」に落つ」として「自然主義が衰へて」以降「白樺派の首領武者小路実篤は、新興文壇の盟主といったやうな、地位を贏ち得た。」と書かれる。一方、同号に掲載された第二十回の「青年文士録」中「私淑せる文士」欄に徳富蘆花、大町桂月に次いで多く挙げられるのは田山花袋の名であり、附録に書かれた武者小路実篤ら白樺派の主要作家は殆ど挙げられていない。文壇に新しい勢力が登場してもなお、多くの文学青年たちが旧世代に模範を求めていたことが指摘できる。

このような明治四十年以降の文学青年たちを登場人物としつつ、芸術そのものではなく発表に悩む富井の葛藤と日記という肉筆を活

字化する様式上の葛藤を同時に提示し、最終的に富井が創作を止めることでテキストが閉じられる本作は『文章世界』をはじめとする明治四十年前後の「自然主義」周辺言説を受容した「浅はか」な「無名作家」たる文学青年たちの葛藤と挫折を活写した作品である。であるからこそ、表題に冠されるのは富井という固有名詞ではなく、「無名作家」という普遍化された表現なのだ。

菊池は後に「芸術と天分——作家凡庸主義」⁽⁴¹⁾の中で「多くの入達が、天分なくして文芸に与ることの誤ちを警告し、またさうした為に起つた凡庸作家の悲哀を語つて居る。」と書いた。「作家凡庸主義」との主張からすれば、作家志望を断ち「平凡人としての平和な生活」を指向するに至つた富井の結末は不本意なものであるう。その意味で、凡庸な無名作家たる富井の書いた文が巡りめぐつて『中央公論』に掲載される作品の形式は「自然主義」からの脱却を果たした文学青年たちを考えるうえで意義があり、またそのことが「自然主義」以後の文学史を考えることに他ならないのだが、余白で論じるには余りに大きい課題であるため、今後さらなる検討を重ねることを書いて本稿を終えたい。

注

- (1) 菊池寛「無名作家の日記」『中央公論』第三十三年七月号（大正七年七月）。引用は全て初出に拠り、ルビや傍点は省略した。旧字は新字に変換した。
- (2) 前田潤「菊池寛「登場」の内幕——「文壇」を睨む「無名作家」——」『立教大学日本文学』第七十六号（一九九六年七月）

- (3) 安藤宏「表現機構としての『文壇』」『近代小説の表現機構』(二〇一二年三月 岩波書店)
- (4) 東雲かやの「特集小論……大正期の『私』を読む 菊池寛「無名作家の日記」『私小説研究』第六号(二〇〇五年三月)
- (5) 片山宏行「無名作家の日記」解説にかえて『文藝 もず』第十五号(平成二十六年六月)
- (6) 注(5)に同じ。
- (7) 菊池寛「自信がなくて意外にも高評だった『忠直卿行状記』」『新潮』第三十巻第一号(大正八年一月)
- (8) 中村白葉「蟬啼く朝……硯を洗つて 七月文壇から(八)」『時事新報』(大正七年七月十二日)
- (9) 中村星湖「本年文壇の決算(三) 小説界(三)」『時事新報』(大正七年十二月十九日)
- (10) 芥川龍之介「あの頃の自分の事」『中央公論』第卅四年新年号(大正八年一月)
- (11) 菊池寛「大島が出来る話」『新潮』第二十八巻第六号(大正七年六月)
- (12) 菊池寛「青木の出京」『中央公論』第卅三年十一月号(大正七年十一月)
- (13) 菊池寛「葬式に行かぬ訳」『新潮』第三十巻第二号(大正八年二月)
- (14) 宗像和重「時と紙筆とを費やす者」——太田豊太郎の手記をめぐって——『『投書家時代の森鷗外 草創期活字メディアを舞台に』(二〇〇四年七月 岩波書店)
- (15) 注(7)に同じ。
- (16) 菊池寛「半自叙伝」『文藝春秋』第七年第六号(昭和四年六月)
- (17) 山本芳明「文壇と市場のアルケオロジ」『文学』第十七巻第三号(二〇一六年五月)
- (18) 注(17)に同じ。
- (19) 旭見生「懸賞小説当選作者 今昔物語」『文章世界』十二巻二号(大正六年二月)
- (20) 吉野辰三のモデルは『文章世界』の投書家として著名であった皆川行人(本名は野村梅吉)と推定されるが、詳細は別稿にて報告したい。
- (21) 一方で菊池は『万朝報』の懸賞小説に複数回当選している。菊池の投書先は主に新聞であり、雑誌への投書は殆どしていないことを指して自身の自然主義との距離を語っていると考えられる。
- (22) 『新思潮』(第四次) 第九号(大正五年十一月)
- (23) 同名の雑誌では尾崎紅葉ら硯友社社員を中心に創刊された『文学世界』(明治二十四年三月)——二十七年六月、全十二冊 春陽堂が知られているが、本誌は一冊につき説切小説一本が掲載される単行本式の冊子であり、本作で語られる『文学世界』の性格とは異なるため扱わなかった。
- (24) 某大家談、TN生手記「余の投書家時代」『文章世界』一卷七号(明治三十九年九月)
- (25) 田山花袋「予の投書家時代」『文章世界』三巻十三号(明治四十一年十月)
- (26) 不知火「予の懸賞小説家時代」『文章世界』三巻十五号(明治四十年十一月)
- (27) ABC「小文豪日記」『文章倶楽部』第二年第二号(大正六年二月)
- (28) ABC「文学青年の生活から」『文章倶楽部』第一年第四号(大正五年八月)
- (29) (作者未詳)「大学生の日記」『文章世界』一卷二号(明治三十九年四月)
- (30) 黄金冠「初めて出京したる一文学青年の日記」『文章世界』第五巻第十六号(明治四十三年十二月)
- (31) MZ生「一文学青年の告白——減び行く生活と芸術——」『文章世界』七巻七号(明治四十五年五月)
- (32) 国木田独步「酒中日記」『文藝界』第十号(明治三十五年十一月)
- (33) 山口直孝「『クロードディアスの日記』論——敵対する日記」『私』を語る小説の誕生——近松秋江・志賀直哉の出発期』(二〇一一年三月 翰林書房)
- (34) NK生「文章講談 事実の見方と小説の形式」『文章世界』三巻十五号

(明治四十一年十一月)

(35) 紅野謙介「懸賞小説の時代」『投機としての文学 活字・懸賞・メディア』

(二〇〇三年三月 新曜社)

(36) 注(33)に同じ。

(37) 松尾靖秋『原稿用紙の知識と使い方』補訂版(一九八三年三月 南雲堂)

(38) 正宗白鳥「自然主義盛衰史」第二回『風雪』第二卷第四号(昭和二十三年四月)

(39) 正宗白鳥「自然主義盛衰史」第十回『風雪』第二卷第十二号(昭和二十三年十二月)

(40) 『文章倶楽部』大正七年一月特別拡大号(大正七年一月)

(41) 菊池寛「芸術と天分——作家凡庸主義——」『文章世界』十五卷三号(大正九年三月)